

心の進化研究の意義と可能性：原意識、理性、道徳

オーガナイザ：田中泉吏（慶應義塾大学）、鈴木大地（自然科学研究機構）

提題予定者：

鈴木大地（自然科学研究機構）：「原意識の進化に迫るための見取り図」

網谷祐一（東京農業大学）：「『理性の進化』をめぐる方法論的問題」

矢島壮平（東京大学）：「進化倫理学の可能性と限界」

企画の主旨：

心的な能力や特性についての科学的な研究は、前世紀後半以降大きな発展を遂げてきた。そのなかでも進化的観点からの研究は、今日に至るまで徐々にその重要度を増している。心についての哲学的な考察も、認知科学や神経科学、コンピューターサイエンスの知見が必要不可欠というだけでなく、進化生物学の知見を欠いても最早成立しないと言えるだろう。とはいえ、進化の理論や具体的なデータを踏まえた研究はまだ端緒についたばかりである。それゆえ、哲学者が古代ギリシャ以来興味を抱いてきた意識や理性、それに道徳をめぐる問題に対して進化研究がどのような答えを与えてくれるのか、進化研究によって何がどこまで明らかになるのかについては、依然として不明瞭な点が多い。そこでこのワークショップでは、心の進化に深い関心を寄せる哲学・倫理学および生物学の専門家に話題提供をしてもらい、心の進化研究の意義や可能性（あるいは限界）について議論をしたいと考えている。

まず鈴木は意識、とくに原意識あるいは原初的意識の進化に着目する。はじめに、意識を科学的に説明する際に進化的説明がどう位置づけられるか論じる。続いて、進化発生学で用いられる概念がいかにして意識の進化に拡張して適用できるか、また実際の進化発生学的研究がどのように意識の進化を明らかにしうるか検討することにより、原意識の進化を研究するための概念的枠組みおよび実践方法を模索する。

次に網谷が理性にスポットを当て、理性の進化を研究する際に生じる方法論的な問題について考察する。一つの問題は、「理性の進化」を説明する際の被説明項は何かという問題である。これは「理性」（「合理性」）が非常に多義的であり類義語も多いことだけでなく、人間の卓越性（他の動物と異なる部分）のどの部分を説明の対象にするのかという問題もある。こうした点を検討することで、「理性の進化研究」の可能性と限界について考えることができる。

最後に矢島が道徳心理に関する進化研究の意義について論じる。具体的には、互惠性の進化に関する研究から、行為を動機づける心理形質としての感情についての仮説を提起できる可能性が吟味される。他方で、そうした進化研究とその帰結が行為の動機づけそのものに対してどのような意味をもつのかという実践的な観点から、進化研究の限界が見極められる。

以上の三つの講演からは心の進化研究に対する多様なアプローチのあり方がわかるだけでなく、それらを比較し相互参照することで、それぞれの分野の今後の展開につながるヒントが得られるはずである。また三つの講演のいずれもが、進化生物学の概念や理論、あ

るいは方法論についての科学哲学的議論を踏まえたものであることを、最後に申し添えておきたい。